

## 6. 座右の銘

青野氏の座右の銘は、「全力前進」である。全力前進とは、「絶えず前向きに物事にとり組み、とにかく振り返らずに前に進んでいく」ことであり、その姿勢には決まって「チャレンジ精神」をともなう。

後述の、青野氏のお薦めの本のなかに司馬遼太郎の『坂の上の雲』がある。同書の「あとがき」にはこう記されている。

このながい物語は、その日本史上類のない幸福な楽道家達の物語である。やがて彼らは日露戦争というとほうもない大仕事に無我夢中でくびをつっこんでゆく。楽道家達は、そのような時代人の体質として、前のみを見つめながらあるく。のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朵の白い雲がかがやいていとすれば、それのみをみつめて坂をのぼってゆくであろう。

青野氏の「全力前進」の意味を捉えた文章である。

## 7. 若い世代に向けてのメッセージ

青野氏から若い世代へのメッセージは、「誠実に信用重視」、そして「つねに前向きに力強く」である。


青野氏のメッセージとタオル業界全体を見据える広い視座は、すでに次世代へ受け継がれている。現在、染色工業組合の理事長を務める山本敏明氏、そして副理事長を務める田中愛子氏（「タオルびと」2016年12月号～2017年3月号）は、青野氏の意思を継承し、それぞれの立場から染色業界の未来を考えている。

山本氏は、晒し場の労働条件の改善を視野に入れつつ、環境問題に配慮した設備投資と技術開発に業界全体として取り組んでいる。また同時に、メディアやタオルソムリエ研修会などをおして積極的に情報発信もしている。田中氏は、自社の東洋繊維協同組合を軸

足にして、「コットンサイクルプロジェクト」や「今治発！種からタオルマフラー」に参加し、他業種の人を巻き込みながら晒し場の新たなとり組みや技術について精力的に情報発信している。

今治の晒し場の歴史を語るなら、「青野さんの話はぜひ文字として残してほしい。いまの晒し場は、青野さんが研究してつくり上げた技術で成り立っている。そういうことを業界の内外にわかるように残してほしい。うちらは何もしとらん。青野さんらが開発してくれたことを真似しよるだけです。」こう語るのは田中氏である。それほど、若い世代に影響力を与え、産地イノベーターとしての役割を担ってきた人物が青野氏である。

## 8. お薦めの本

お薦めの本の一冊目は、司馬遼太郎  の『坂の上の雲』（文藝春秋、1973年）である。同書は、1968年から1972年にかけて産経新聞夕刊に連載された歴史小説であり、近代国家として新たなスタートを切った「明治日本」を舞台に、松山出身の秋山好古、秋山真規、正岡子規の3人の生涯を描いたものである。青野氏は、秋山兄弟の「明治日本」という国家のために尽くす強い精神に心を動かされた。



司馬遼太郎『坂の上の雲』

第1巻、文藝春秋、1969

年（今治市立図書館所蔵）

2冊目は、五味川純平  の『人間の条件』全6冊（三一書房、1956～1958年）で

ある。主人公の梶<sup>かじ</sup>は、徴兵を逃れて満州へ渡り軍需会社が所有する鉱山の労務管理の職に就く。しかし、鉱山では特殊工人（中国人捕虜）に対する不当処刑がおこなわれており、梶がこれに抗議した結果、梶は憲兵と対立し拷問を受けた挙げ句にソ連国境に召集される。ソ連軍との戦いで部隊は壊滅し、梶は捕虜となるが、脱走して亡き

妻を求めて雪原をさまよひ最後は息絶える。  
青野氏は主人公の梶をとおして、人間はど  
んな極限状態にあっても平等の精神をもつ  
生き物であり人間は公平である、という強  
いメッセージに感動を覚えた。

いずれの著書も、人間としての尊厳を問  
うた深い物語である。（完）

（文責・インタビュー： 辻智佐子）



五味川純平『人間の条件』上  
巻、三一書房、1967年（今  
治市立図書館所蔵）

## 参考文献

愛媛県繊維染色工業組合編 [2015]「設立 50 周年 染色業界の明  
日を拓く」。

「愛媛新聞」2010年2月15日。

「繊維ニュース」2006年7月31日、2007年4月19日、2013  
年6月13日、2014年6月16日。

「タオルリポート」2012年11月7日。

有限責任事業組合オゾン漂白協会「オゾンブリーチ」（小冊子）。

## 編集後記

青野さんのお名前は、2012年11月16日に「タオルびと」がスタート  
するずっと以前から存じ上げていました。本文でも触れましたが、1970年  
代後半から1980年代にかけて特許取得者として「染織試ニュース」にそ  
の功績が頻繁に掲載されていたからです。それもあって、青野さんにはぜひ  
お会いしたいと思っていました。このたび実現し、嬉しさ一入でした。

青野さんが特許取得数の多い技術者なので、お会いする前は「強面の堅物」  
かな、と勝手に想像していましたが、まったくそうではありませんでした。  
笑みの絶えない、とても温和な方でした。しかも、文系出身で、染晒技術の

修得は大学卒業後の独学と聞いて驚きました。

インタビュー（2016年3月12日）終了後に、専務取締役の門田さんに工場を案内してもらいながら、こんなことを耳にしました。「社長から地球の成り立ちの話を何度も聞かされるんですよ。」どうやら青野さんは、物理から小説まで読みこなす無類の読書家で、とくに宇宙や地球の話をするのが好きだそうです。そのときに、青野さんの特許取得技術がつねに環境と深い繋がりがあるのはなぜか、という私的な疑問に対する答えがみえたようで、「なるほど」とひとり合点しました。青野さんの発想の源が、ずっと先を見据えたガイアを想うところにあり、物事を考える視座が人とは違う、スケールが違うんだな、と納得したのです。そして、豊富な知識と浩々たる視座から生み出される技術を惜しみなく解放する姿勢は、これまたガイアの思想そのものだと思いました。（辻）

#### 次回の「タオルびと」

「タオルびと」の16人目は、(株)宮田ルームサービスを運営する宮田正志氏である。宮田氏は、タオル織機のメンテナンスをおこなう織機についてのプロである。どんなに素晴らしいタオルをデザインしても、それが思いどおりに製織できるか、あるいはデザイン以上の製品に仕上がるかどうかは、織機の微妙な調整に大きく左右される。この調整をタオルメーカーの要望に合わせてセッティングするのが宮田氏の仕事である。決して表には出ないが、タオルづくりを支える縁の下の力持ちである宮田氏に話を伺う。

